

# 「もののけ姫」の神話的意味

## Myth meaning of The Princess Mononoke

福 沢 健

### 1 神話的意味について

#### 「もののけ姫」のあらすじ

宮崎駿原作・脚本・監督のアニメーション映画「もののけ姫」は、一九九七年七月に東宝系で公開され、翌一九九八年の五月末の段階で、興行収入が百八十六億五千万円、配給収入が百十二億千六百万円、観客動員数が千三百五十三万人を記録しました。この「もののけ姫」は、発端・タタラ場・サンへの侵入と救出・エボシの侵入と神殺し・世界の修復の五つの場面に分けることができます。

【発端】 舞台は中世日本。東北地方にある蝦夷の隠れ里に、突然タタリ神が姿を現しました。タタリ神とは、それを攻撃するものに対してタタリを与える存在です。アシタカは、村の少女たちを守るため、タタリを受けることを覚悟でタタリ神に対して矢を射しました。タタリ神は倒れましたが、アシタカは右腕にタタリを受けてしまいます。タタリを放置すると、呪いは骨まで腐らせ、死に至せることになるため、アシタカはタタリから解放される方法を求めて、西の国に旅立つことになります。

【タタラ場】 西へと向かったアシタカは、エボシのタタラ場にたどり着きます。エボシのタタラ場は鉄を生産するために周囲の森を切り開き、森の獣たちと激しい衝突を繰り返していたことが、この場面では説明されています。

【サンへの侵入と救出】 アシタカがタタラ場に着いた夜、山犬に育てられた娘サンがタタラ場に侵入するという事件が起こります。サンは、タタラ場の主であるエボシのことを森の破壊を推し進める張本人であると信じ、エボシに対して強い憎悪を抱いているのです。アシタカは、争うエボシとサンの間に割って入り、サンをタタラ場の外へと連れ出そうとします。このとき、タタラ場の女の放った石火矢によって、アシタカは瀕死の重傷を負いました。アシタカを死の淵から救ったのは、シシ神の力でした。

【エボシの侵入と神殺し】 石火矢衆の指導者であるジゴ坊に促されて、エボシはシシ神の首を取るために、シシ神の森へと入っていきます。シシ神の森にたどり着いたエボシは、そこに姿を現したシシ神に対して石火矢を発射します。エボシが放った二発目の弾丸は、シシ神の首を打ち抜きます。エボシの「神殺し」によって、首を失ったデイダラボッチ（シシ神）は暴走をはじめ、シシ神の森は死滅し、タタラ場も崩壊してしまいます。シシ神の首は金桶に押し込められ、ジゴ坊たちの手によって森の外へ運び出されました。一方、アシタカは、山犬モロの最後の一撃によって、片腕を失ったエボシを救出した後、サンと共にジゴ坊を追います。

【世界の修復】 ジゴ坊の手からシシ神の首を取り戻したアシタカとサンは、デイダラボッチに首を返します。首を取り戻したデイダラボッチは、そのまま朝日の中で倒れていきます。その死体からは新たな草木が芽吹き、森は再生します。生まれ変わったタタラ場と森の中で、エボシとサンはそれぞれの新しい生活をはじめ

めることとなります。そして、アシタカはタタラ場と森の中間に身を置いて、両者の間を往復する道を選んだのでした。

## 神話とは何か

最初に、今回の話の目的を示しておきましょう。私は、この話の中で、「もののけ姫」の神話的な意味について考えていきたいと考えています。

ただし、皆さんにとって、神話的意味というのは聞き慣れない言葉だと思えます。そこで、「もののけ姫」の分析に入る前に、神話的意味とはどのようなものかについて、説明しておきましょう。ルーミア生まれの宗教学者ミルチャ・エリアーデは、神話について次のように定義しています（風間敏夫訳『聖と俗——宗教的なものの本質について』法政大学出版局、一九六九）。

神話は、時の初めに、はじめて行われた太初のでき事として、聖なる歴史を物語る。…（中略）…神話を（語る）のは、そのはじめに起こったことを告げ知らせることである。神話が一度（語られる）と、すなわち開示されると、たちまちそれは抗すべからざる真理となる。それは絶対的な真理を樹立する。…（中略）…神話は常に（創造）の報告であり、人は何がどのように行われたか、いかにしてそれが存在し始めたかを物語る。

エリアーデは、神話とは世の中の起源を説明するものだと言っています。つまり、この世のものはなぜ存在するのかという理由について説明したものが、神話なのだと言っているのです。例えば、人間が火を使えるようになった理由について、火の起源の神話が語られます。また、人間が死ぬことの原因について、死の起源の神話が語られます。世の中にはその存在があたりまえのもの

だと思っていなくても、なぜそうになっているのかという理由を考えてみると、説明できないものがたくさんあります。皆があたりまえだと考えているものに対しては、自分も皆と同じようにあたりまえだと考えて、それ以上理由を考えようとしません。だから、どうしてそれがあたりまえなのかと改めて聞かれると、はっきりと答えられなくなってしまうのです。このように普段からあたりまえだと思っていて見過ごしているもので、よく考えてみるとどうしてそうになっているのか分からないものに対しては、その起源を語る神話が作られます。そして、その神話を皆で共有する（皆が同じ神話を知っている）ことによって、そのはじまりについて互いに納得したつもりになっているのです。

このように神話を世の中の起源を説明するものとして定義すると、神話が語られるのは古代の社会だけの出来事でないことに気づく人もいるでしょう。

現代の社会においても、なぜそうになっているのか、説明できないものはたくさんあります。例えば、男と女との社会的な役割の違いは、なぜあるのでしょうか。また、国家は、なぜあるのでしょうか。このような事柄について、現代の人間もまた、それを神々の物語ではないけれども、そのはじまりを語る物語を作って、そのような制度・考え方が存在する理由を説明しようとしているのです。人の心は理論だけでは動かされません。便利な機能を理屈っぽく繰り返し説明をするよりも、その存在のはじまりを語る物語を話した方が、相手に大きなインパクトを与えます。理論がどんなに優れていても、そこに物語が付随していなければ、人々は納得しようとしません。物語は直接的なメッセージを発していません。しかし、物語は人の心に対する強い規制力を持っているのです。フランスの記号学者・思想家ロラン・バルトは、このように人々の心をつかまない間にコントロールする物語の働きを神話作用と呼びました（篠沢秀夫訳『神話作用』現代思潮社、

一九六七)。神話的意味とは、人々の心を知らない間にコントロールする物語の働きのことです。

## 表象とコンテキスト

「もののけ姫」の神話的意味の考察とは、「もののけ姫」の物語がそれを見た人々に対してどのようなメッセージを送っているか、という点について考えていこうとするものです。「もののけ姫」の神話的意味を考えるために、次のような作業を行いたいと考えています。

まず、「もののけ姫」の各場面を分析して、それが何の表象であるかを考えていこうと思います。表象は、「そこにはない或るもの」を「別の或るもの」で表すことをいいます（渡辺守章、渡辺保、浅田彰『表象文化研究―文化と芸術表象』日本放送出版協会、二〇〇二）。「もののけ姫」の各場面の表象の分析とは、各場面がどのような「別の或るもの」を表しているのかについて考えていく作業です。物語全体の意味は、個々の場面の意味の分析を通してなければ、導き出すことができません。個々の場面の組み合わせによって、全体の意味が作られるからです。

私がここで取り上げたいと考えている場面は、エボシのタタラ場、エボシの神殺し、アシタカの選択の三つです。エボシのタタラ場については、実在するたたら場「菅谷高殿」との比較を通して、エボシのタタラ場が近代の産業社会の表象であることを述べたいと考えています。次に、エボシの神殺しについては、アシタカの神殺し・箭括麻多智<sup>やはすのまたち</sup>が夜刀の神を殺す話との比較を通して、エボシの神殺しが近代合理主義の表象であることを述べたいと考えています。最後に、アシタカの最後の選択は、近代文明と自然とを調停し続ける道に持続可能な開発であったことを述べたいと考えています。アシタカがこのような道を選んだ理由は、「もののけ姫」が制作された一九九七年というコンテキスト（背景）の

中に置いてみると分かります。一九九〇年代は、世界的に環境問題がクローズアップされてきた時代です。アシタカの選択は、一九九〇年代の環境思想と関係を持っています。

物語の意味は一つではありません。物語には作者が明確に意図した意味もあれば、作者が意図しなかった、つまり、無意識のうちにかたちづくられた意味もあります。また、作者と受容者との間でも意味が異なる場合もあります。同じ受容者に与える意味であっても、「もののけ姫」が公開された一九九七年と、この論考を書いている二〇〇七年とでは違いがあるはずですが、つまり、神話的意味にも、多様な意味があるのです。私が対象にしたいのは、このアニメーションが公開されたときの神話的意味です。つまり、一九九七年において、「もののけ姫」がどのようなメッセージを持つものとして受け取られていたかについて考えたいのです。一九九〇年代における環境思想と、「もののけ姫」とはどのようにリンクしていたかを、ここでは考えていくことにします。

## 2 エボシのタタラ場について

### 菅谷高殿

前置きはこれくらいにして、「もののけ姫」の場面の分析に取りかかりましょう。

はじめに取り扱うのは、エボシのタタラ場です。ここで私が言いたいことは、エボシのタタラ場は、外見は中世のものとして設定されていますが、実際は近代の産業社会の表象として描かれているということです。エボシのタタラ場は、島根県雲南市吉田町の菅谷高殿をモデルにしたといわれています。菅谷高殿とエボシのタタラ場とを比較していくことによって、エボシのタタラ場が近代の産業社会の表象であることを確認していきたいと思います（エボシの「タタラ場」と実在の「たたら場」と混乱しないよう

に、「タタラ場」「たたら場」と書き分けることにします。

菅谷高殿は、全国でただ一つ残る永代たたら場の遺跡です。中世、製鉄は野だたらと呼ばれる移動式の小規模なたたらによって行われていました。これが近世に入ると、高殿の中に炉を据えて稼働する、大規模な永代たたらが生みだされました。菅谷高殿も元和元年（一六一五）に作られ、大正十年（一九二一）まで稼働していたといわれています。ただし、高殿は何度か火災のために焼け落ちており、場所も移動しているため、現存する菅谷高殿は元和元年の姿をそのまま残しているわけではないそうです（財）鉄の歴史村地域振興事業団ホームページ「鉄の歴史村」<http://www.tetsunorekishimura.jp/index.htm>）。

菅谷高殿は、中世、近世のたたら場の中では最大の規模を持っています。しかし、エボシのタタラ場の規模は、それをさらに上回るものです。エボシのタタラ場の巨大さを、ふいご（製鉄炉に風を送る装置）と働く人の数から確認しておきましょう。

エボシのタタラ場では、左右五人ずつ、全部で十人の女たちがふいごを踏んでいます。これは踏みふいごといわれるものです。一七五四年に書かれた『日本山海名物図絵』（名著刊行会、二〇〇五）には、左右三人ずつ、全部で六人の男たちがふいごを踏む絵が描かれています。踏みふいごは大体六人で踏むのが普通で、エボシのタタラ場のように十人で踏むふいごはありませんでした。エボシのタタラ場の製鉄炉は、ふいごを踏む人数から見ても、標準的なたたらよりも二回りくらい大きなものとして設定されているようです。ちなみに、菅谷高殿では水車ふいご（箱形の吹差ふいごを水車の動力で動かすもの）が使われています。水車ふいごが使われるようになったのは、明治時代になってからです。

次に、タタラ場で働く人の数を見ておきましょう。エボシのタタラ場には、たくさんの人が働いています。菅谷高殿のまわりには、菅谷山内という集落がありました。明治十八年（一八八五）

の記録によると、菅谷山内には三十四戸、百五十八人の人たちが住んでいたそうです。エボシのタタラ場にはどれくらいの人々が住んでいるのか分かりませんが、タタラ場の中は一つの町のように活気を呈しています。

製鉄炉の大きさを見ても、働いている人々の数を見ても、エボシのタタラ場は実際のたたら場よりもかなり大規模なものとして設定されていることが分かります。つまり、エボシのタタラ場は、実際のたたら場を忠実に再現したものではないのです。特別な意味を持たせるために、その巨大さを誇張して描かれているのです。

では、その特別な意味とは何だったのでしょうか。エボシのタタラ場が初めて登場した場面を思い起こしてください。エボシのタタラ場は、全ての木が刈り尽くされたげ山の中で、もうもうと煙を噴き上げながら立っていました。その姿は、まるで公害をまき散らした近代の工場のようなのです。タタラ場が大規模なものとして描かれたのは、この近代のイメージを強調するためであると考えられます。そこで、エボシのタタラ場が、近代のイメージによって描かれていることを、宗教性の問題から見ていきたいと思っています。

### 金屋子神

たたら場には、製鉄の神として金屋子神が祀られていました。菅谷高殿にも金屋子神を祀る祠があります。金屋子神は非常に醜くて嫉妬深い性質を持つ女神であると考えられていたため、たたら場は女人禁制とされました。たたら場で働く男は、妻が月経の時たたらへは入りませんでした。また、産褥さんじょくの時仕事は休んで、もし仕事の手が離せないなら、家へ帰らず、生まれた子供の顔も見なかったといわれています。

一方、エボシのタタラ場では、先に見たように、女たちがふいごを踏んでいました。金屋子神が祀られているならば、タタラ場

は女人禁制となるはずです。ここから見て、どうやらエボシのタタラ場では金屋子神は祀られていないようです。実際、「タタラ場」の場面では、タタラ場の内部が詳しく紹介されていますが、金屋子神を祀る祠の存在は特に描かれていません。

金屋子神がたたら場で祀られたのは、金屋子神が人間に製鉄の方法を教えたと考えられていたからです。『鉄山秘書』（『日本鉱業史料集 近世篇1』白亜書房、一九八二）に載せられる「金屋子神祭文」によると、金屋子神は、初め高天原から播磨千種に降臨し、後に白鷺に乗って出雲比田山中に移り、七か所にふいごを立て製鉄を教えたといわれています。山本ひろ子（『鉄の女神』『ヘルメス』終刊号、一九九七）が説くように、近世より前の時代（以下、これを前近代と呼ぶことにします）において、製鉄とは、金屋子神と交感して、その神の力を借りて物質を変成する呪的行為だと考えられていました。たたら場で働く製鉄技術者は、金屋子神を祀る宗教技術者でもあったのです。したがって、たたら場に金屋子神が祀られないということは、あり得ないことでした。ところが、エボシのタタラ場からは、このような宗教性はきれいに取り払われています。

### 祈りと労働

エボシのタタラ場が近代の産業社会の表象であるというためには、宗教性が排除されていることが近代の産業社会の特徴であることを説明しておかなければなりません。

この点について労働という観点から説明したのが、社会哲学の今村仁司（『近代の思想構造―世界像・時間意識・労働』人文書院、一九九八）です。今村は、近代性の構造を支える主要な柱として「自己との関係」「他人との関係」「人間と自然との関係」の三つを挙げています。この柱の中で、今扱っている宗教性の問題と関わるのは、三つ目の「人間と自然との関係」です。今村は、

人間と自然との関係とは対自然活動としての生産活動のことだと言っています。近代より前の人間と近代の人間とでは、この生産活動に対する考え方が決定的に違っていました。近代より前の人間にとって、生産とは祈りのようなものでした。祈りというのは分かりにくい言い方ですが、これは自然を畏怖し、自然から与えられた恵みに感謝する気持ちのことを言っています。だから、その感謝の気持ちを表明するために、生産活動に伴うかたちで宗教活動が行われたのでした。これに対して、近代の人間は、生産活動のことを祈りではなく労働だと考えていました。生産活動が労働として捉えられたとき、自然は感謝の対象ではなくなり、征服の対象となります。ここでは、自然は、人間に服従し人間に生産物を供給し続ける存在となります。労働としての生産活動には、宗教性はないのです。

今村の意見を参考にして、前近代の生産活動と近代の生産活動の違いを、もう一度まとめておくと、次のようになります。

- ・ 前近代の生産活動Ⅱ自然を感謝の対象と捉えた。生産活動は、自然に対する感謝の「祈り」と一体のものであった。
- ・ 近代の生産活動Ⅱ自然を征服の対象と捉えた。生産活動は、物質である自然から生産物を取り出す「労働」であった。

生産活動という観点からエボシのタタラ場を見ると、タタラ場から宗教性を取り払われている理由がよく分かります。エボシのタタラ場で金屋子神が祀られていないのは、そこで行われる産鉄活動が労働であることを表しています。そこには自然への畏怖や感謝はありません。労働によって、周囲の自然から生産物を奪い続けるタタラ場は、まさに近代の産業社会の表象として描かれています。

## 3 エボシの神殺しについて

## 二つの神殺し

つぎに、エボシの神殺しについて分析していきましょう。エボシの神殺しの分析を通して私が言いたいことは、エボシの神殺しは近代合理主義の表象であるということです。このことは、「もののけ姫」に描かれているもう一つの神殺しであるアシタカの神殺しと比較してみると、よく分かるように思います。

「もののけ姫」の構成を見ると、アシタカの神殺しとエボシの神殺しが対称的に配されていることが分かります。「もののけ姫」は、アシタカがタタリ神を殺すシーンから始まりました。タタリ神も「神」といわれているのですから、これもまた神殺しということになります。そして、エボシの神殺しによって、「もののけ姫」は終末へとなだれ込みます。このようなかたちでアシタカの神殺しとエボシの神殺しを並べてみると、「もののけ姫」のストーリーは神殺しから始まって神殺しで終わっていることに気づきます。そして、アシタカの神殺しとエボシの神殺しは、ストーリー上の位置だけではなく、意味の上でも対称的な特徴を与えられているのです。具体的に言えば、エボシの神殺しの近代性を強調するために、前近代的な性格を持つアシタカの神殺しが対置されているのです。以下、この二つの神殺しの意味の違いについて見ていきましょう。

## アシタカの神殺し

まず、アシタカの神殺しから見えていきましょう。アシタカの神殺しの場面で強調されているのは、森と村との境界です。森と村との境界には石垣がありました。タタリ神の侵入はその石垣を破壊するシーンから始まります。そして、村に侵入したタタリ神を、アシタカは弓で射殺します。アシタカは、境界を破壊して人間の世界に侵入してきた神に対して、その猛威を防ぐために神殺

しを行ったのです。

このアシタカの神殺しが前近代の論理で行われていることは、『常陸国風土記』の行方郡なまかたの条に載せられている夜刀やとの神の話と並べてみると分かります（『常陸国風土記』とは、元明天皇げんめいの命令によって作られた奈良時代の地誌『風土記』の中の一つです）。そこで、夜刀の神の話とアシタカの神殺しを並べてみて、その共通性について考えてみましょう。

古老がいうことには、「石村玉穂宮に大八洲お治めになられた天皇（継体天皇）のみ世に、「えらい」人があった、箭括氏の麻多智という。「麻多智は」郡役所から西の谷の葦原を占有し、開墾してあらたに田を作った。この時、夜刀の神は、群れをなし互いに仲間を引き連れてことごとくみんなやってきた。そしていろいろさまざまに妨害し、田を作り耕させなかった。

《土地の人はいう、「蛇を呼んで夜刀の神としている。その姿は、からだは蛇で頭には角がある。杞（川ヤナギ）を身に帯びていると難を免れるが、運悪くこれを見ると一家一門は破滅し、跡継ぎの子孫がなくなる。」だいたい、この郡役所の側の野原に非常にたくさん住んでいる。》ここにおいて麻多智は激怒のころをおこし、甲鎧で身を固め、自身で仗を手に取り、打殺し追い払った。そこで、山の登り口に行き、「土地占有の」標の大きな杖を境界の堀に立てて、夜刀の神に宣告して、『ここから上は神の土地とすることを聞き入れてやろう。だがここから下は断じて人の田とするのだぞ。今後は、私が神の祭祀者となつて、代々永く敬い祭ろう。どうか祟ることのないよう、恨んではならぬ』といって、社を作つてはじめてお祭りした。すなわち、また耕田一十町あまりをひらき、麻多智の子孫が、互いに受け継いで祭を執り行い、いまに至るも絶えない。

（吉野裕『風土記』平凡社ライブラリー、二〇〇二）

まず、夜刀の神の話しの内容を確認しておきましょう。箭括麻多智という人が「郡役所の西の谷の葦原」を開墾して田にしようとしたとき、夜刀の神が多数現れてそれを妨害しました。麻多智はこの神が開墾の妨害をするのに怒り、「甲鎧で身を固め、自身で仗を手に取り、打殺し追い払」うという強硬手段に出ます。つまり、麻多智は、夜刀の神に対して神殺しを行ったのです。夜刀の神の「ヤト」については、新古典全集『風土記』の頭注に「東国方言のヤチ・ヤツと同じで、山の谷合の湿地帯をいう」とあります。夜刀の神は西の谷の葦原に住む神だったようです。麻多智はもともと神の住んでいた領域に田を作ったので、夜刀の神が怒ったのです。

夜刀の神の話を、境界という視点から整理しておきましょう。麻多智が西の谷の葦原に作ったとき、今まであった神の領域と人の領域の境界は不明確になってしまいました。だから、人の領域に神が侵入してきたりすることが起こるのです。それは、人にとつてとても危険な状況です。夜刀の神の姿は「からだは蛇で頭には角がある」というもので、運悪くこの神の姿を見ると、その神は一族をすべて滅ぼしてしまおうとあります。このように恐ろしい神が自分たちのまわりに侵入するようでは、人は安心して暮らしていくことができません。そこで、麻多智の神殺しが行われます。麻多智の神殺しで大切なのは、麻多智が夜刀の神を打ち殺した後、境界の溝に杖を立てて、その境界を守るために祭祀者となることを宣言したこととです。麻多智による境界の設定によって、不明確になっていた神の領域と人の領域は再び明確になり、夜刀の神が人の領域に侵入することはなくなりました。麻多智の神殺しの話は、人が自らの生活を守るために、神との境界を定める物語なのです。

文化人類学の山口昌男（『文化と両義性』岩波現代文庫、二〇〇〇）は、麻多智の役割について記号論の立場から説明していま

す。山口によれば、麻多智は、野原Ⅱ蛇Ⅱ夜刀神というかたちで表現、喚起される自然Ⅱ混沌と、田というかたちで確認される文化Ⅱ秩序との間の仲介者であり、物語の記号論のレヴェルでは負の価値の正の価値への仲介者であり、宇宙論的にいえば秩序を確かめるために混沌を喚起するものというようになります。山口の言い回しは難しいので、山口の言葉を借りながら、私なりに整理してみます。神と人が混じり合って住む状態は混沌です。神の領域と人の領域はそれぞれ自然と文化です。そして、神と人が分かれて住む状態は秩序となります。これらの言葉を用いて、麻多智の神殺しの意味をまとめ直すと、麻多智の神殺しは混沌を文化と自然に分けることによって、この世に秩序をもたらした行為である、ということになります。前近代においては、自然の方が文化よりも圧倒的に強い力を持っていました。混沌は人に危険をもたらします。そこで、神殺しによって秩序を取り戻そうとするのです。前近代の神殺しは、自然の脅威から人の生活を守るために行われるものだったのです。

ここでアシタカの神殺しに戻ってみましょう。タタリ神が石垣を破壊することによって、アシタカの村は自然との境界を失ってしまいました。村に混沌がもたらされたのです。そこで、再び人の領域と神の領域を決め直し、秩序を取り戻すために、アシタカの神殺しが行われたのです。さらに、その秩序が守り続けられるように祈りが捧げられます。このように見てみると、アシタカの神殺しと麻多智の神殺しが、同じ目的、同じ手順で行われていることが分かります。アシタカの神殺しは、前近代の論理に基づいて行われたものとして描かれています。

#### エボシの神殺し

アシタカの神殺しに対して、エボシの神殺しはどのように描かれているのでしょうか。アシタカの神殺しとエボシの神殺しの相

違点を確認しておきましょう。この二つの神殺しの性格の違いは、神殺しが行われた場所に端的に表れています。アシタカは、自分の村でタタリ神を殺しました。一方、エボシの神殺しは、本来人間が入ることのできないシシ神の森の一番奥で行われました。アシタカが人の領域に侵入してきた神を殺したのに対して、エボシは逆に神の領域に自ら侵入し、神を殺したのです。アシタカは神の猛威から自らの生活を守るためにタタリ神を殺したのに対して、エボシがシシ神を殺した理由は、自らの生活を守るためではなかったのです。

では、エボシは、なぜシシ神を殺したのでしょうか。エボシの神殺しは、ジゴ坊の依頼に応えるかたちで行われました。ジゴ坊は、エボシに石火矢衆四十名を貸し与えた返礼として、シシ神殺しを依頼したのです。しかし、エボシは、ジゴ坊に頼まれたことによって、シシ神を殺すことを決めたわけではありません。タタラ場でエボシは新型の石火矢の試射をしながら、「森に光が入り山犬どもがしまれば、ここは豊かな国になる。古い神がいなくなればもののけたちもただのケモノになろう。さすればもののけ姫も人間にもどろう」と言っていました。古い神とはシシ神のことです。この言葉から、エボシがシシ神を殺す本当の理由が窺えます。エボシのシシ神殺しの目的は、森からもののけを一掃することにあつたのです。もののけとは、人の理解を超えた存在です。エボシは、人の理解を超えたものの存在が許せなかったのです。このエボシの態度の根底には、世の中のいかなる場所においても、合理的に理解できないものの存在を許そうとしない近代合理主義の思想が横たわっています。

近代合理主義とはどのようなものを、確認しておきましょう。近代合理主義についてまず知っておかなくてはならないことは、合理主義と近代合理主義は同じものでないということです。合理主義とは、物事を理性によって判断する態度です。合理主義は近

代より前にもありました。この合理主義に対する近代合理主義の特徴は、その能動的、積極的、徹底的性格にあります。竹内啓によれば、近代合理主義は、「宇宙の体系的理解、人間社会の組織化、人間による自然の征服において、論理的首尾一貫性をあくまでも押し通そうとするもの」であり、理性の限界を容認しないものです。その結果、理論に合わない現実はいり高次の理論によって説明されることが求められ、非合理的な要素は徹底的に排除されるのです。または、それを説明する理論を発明し、合理化しようとしします（『近代合理主義の光と影』新曜社、一九七九）。

合理主義と近代合理主義の違いは、前に取り上げた夜刀の神の話为例にとり分かりやすいでしょう。麻多智は、境界の堀に杖を立てて、「ここから上は神の土地とすることを聞き入れてやろう。だがここから下は断じて人の田とするのだぞ」と宣言し、そこに社を立てました。杖から下の人の世界は、合理主義によって説明される世界です。しかし、杖より上の神の世界は、人の理解の及ばない世界です。そこでは、人の日常生活を支配する合理主義は通用しません。前近代の合理主義は、その適用される範囲が限られていました。一方、近代合理主義には適用されない範囲などありません。世の中全てのものを合理的に理解しようとするのです。

ここで「もののけ姫」に戻ってみましょう。アシタカの村では、森と村とを区切る境界の石垣が築かれていました。アシタカの村は、森を神の領域として認めているのです。一方、エボシのタタラ場には、森との境界がありません。エボシは、森の奥へ奥へとその力を広げていきます。森を神の領域として認めないのです。そして、最後にシシ神の森の最奥部に行き着いたのです。そこで行われたシシ神殺しとは、森に最後に残された非合理的な存在を抹殺することを意図するものです。アシタカの神殺しは、混沌と秩序の領域を分けようとする行為でした。これに対して、エボ



シの神殺しは、森の中に混沌の存在を認めません。森の全てを秩序で覆い尽くそうとするものです。それは、まさしく近代合理主義の精神の表象であると言うことができます。

#### 4 アシタカの選択について

##### アシタカの選択

最後に、アシタカの選択について分析していきましょう。

物語の最後、朝日の中でデイドラボッチが倒れたとき、死滅したはずの森は再生し、山は再び緑になります。生まれ変わった森の中で、エボシとサンはそれぞれの新しい生活をはじめることになります。このとき、アシタカには、サンと共に森に住む、エボシと共にタタラ場に住む蝦夷の村に帰るなど、様々な選択肢がありました。その中でアシタカが選んだのは、タタラ場と森の中間に身を置いて、二人の間を往復するという道でした。このアシタカの選んだ新たな道とは、何を表象しているのでしょうか。

アシタカの選択の意味は、エボシとサンがそれぞれ何を表象しているか考えてみると、分かりやすいでしょう。これまで、エボシのタタラ場、エボシの神殺しの分析を通して、エボシが近代文明を表象する存在であることを述べてきました。サンはこのエボシと対比される存在です。つまり、サンは、近代文明の攻撃にさらされる自然を表象する存在なのです。エボシとサンは、互いに激しく憎み合っています。アシタカがいなければ、二人は再び殺し合うことになるでしょう。近代文明がその能動的、積極的、徹底的性格を放棄することがない限り、文明と自然はぶつかり合うしかないからです。アシタカの存在が、必然的に起こるはずのエボシとサンの争いの再発を防いでいるのです。つまり、アシタカが選んだ道とは、近代文明と自然とを調停し続けることだったのです。アシタカは、近代文明と自然を共生するものとして捉えよ

うとしています。近代文明のために自然を犠牲にしなければならないというような考え方や、自然のために近代文明は捨てられなければならないという考え方を、アシタカは取りませんでした。アシタカにとっては、エボシもサンも重要な存在だったのです。このようなアシタカの選択は、一九九〇年代の環境思想と深い関係を持っています。

##### 持続可能な開発

「もののけ姫」が公開された一九九七年の五年前、一九九二年にブラジルのリオ・デ・ジャネイロで地球サミットが開催され、これを契機に、環境問題の解決に向けて世界が急速に動き始めました。環境問題の国際的取り組みが開始されたのです。地球サミットには一八〇国が参加し、そこで持続可能な開発を目指すリオ宣言と、その具体的な行動計画であるアジェンダ21が採択されました。また、気候変動枠組条約と生物多様性条約の署名も開始されました。持続可能な開発とは、一九八七年に国連「環境と開発に関する世界委員会（ブルントラント委員会）」で提唱された概念で、「将来の世代の欲求を損なうことなく、現在の世代の欲求も満足させるような開発（発展）」のことです。これは、従来の資源・エネルギーの過剰消費による環境破壊を反省して、環境資源基盤の保全を図りながら経済発展を目指す考え方です（UFI総合研究所『手に取るように環境問題がわかる本』かんき出版、二〇〇二）。地球サミットが持続可能な開発を採択したことは、近代文明と自然とを調停しようとする意志の表明でした。そして、「もののけ姫」が公開された一九九七年には、気候変動枠組条約の第三回締約国会議（COP3）が京都で開催され、先進国の間で地球温暖化の原因となる温室効果ガスの削減を義務づけた京都議定書が採択されました。京都議定書も、持続可能な開発を実現するための具体的な行動計画の一つです。COP3において、

日本はホスト国として京都議定書の採択に力を尽くしました。COP3の開催は十二月であり、七月の「もののけ姫」の公開よりも後ということになりますが、COP3の開催の報道を通して、持続可能な開発は二十一世紀の課題であることが繰り返し語られました。「もののけ姫」は、このような社会的コンテクストのもとで公開されました。

「もののけ姫」は、アシタカの視点を通して描かれています。物語の享受者は、視点人物に感情を同化する傾向が強いとされています。アシタカの最後の選択は、それまで積み重ねられてきた環境問題を語る言説と無意識のうちに関連付けられ、当然の行動として受け入れられたでしょう。「もののけ姫」の神話的機能は、持続可能な開発の起源を語るものなのでした。持続可能な開発という考え方は、比較的新しいものです。そのような新しい価値観を常識として世間に広める言説の一つとして、「もののけ姫」は機能していたのです。

#### ギルガメシュ叙事詩

エボシの神殺しは、古代メソポタミアの『ギルガメシュ叙事詩』をモデルとして構想されたといわれています。最後に、「ギルガメシュ叙事詩」との関係を見ていくことによって、「もののけ姫」の神話的意味をまとめておきたいと思います。

ウルクの王ギルガメシュと獣人エンキドゥは、よい材木を求めて香柏（レバノンスギ）の森に旅に出ます。香柏の森は、シユメールの最高神エンリルに命じられた半神半獣フンババが守っていました。森にたどり着いた二人が香柏を伐りはじめると、怒り狂ったフンババが嵐のようなうなり声をあげ、口から炎を吐きながら襲いかかってきました。激しい戦いの末、ついにフンババは倒されます。フンババは倒され、その首は金桶に入れられました。この場面は、『ギルガメシュ叙事詩』（月本昭男訳、岩波書店）の

「第五の石版」に次のように記されています。

- 「……………内」蔵を肺まで取り除いた。  
「……………彼（／それ）」は跳びだした。  
「彼はフンババの」頭を「掴み、」金桶に押し込めた。  
「……………」充滿するものが山に落ちた。  
「……………」充滿するものが山に落ちた。

ギルガメシュとエンキドゥが森の奥まで遠征すること、フンババの首を金桶に押し込めたこと、その死体から何ものかがあふれ出たことなど、『ギルガメシュ叙事詩』とエボシの神殺しとの間には、明らかな共通点があります。

ただし、この後の展開は、「もののけ姫」と『ギルガメシュ叙事詩』の間で大きく異なります。ギルガメシュとエンキドゥは、フンババの首を持ってウルクに凱旋しました。髪を濯ぎ、身を清め、王の衣装をまとい、冠を戴いたギルガメシュの前に、美の女神イシュタルが姿を現します。イシュタルはギルガメシュに熱烈に求婚しましたが、ギルガメシュはそれを拒絶します。怒った女神は天牛をウルクに送ります。この牛は大暴れし、多くの人を殺しました。ギルガメシュとエンキムドゥは協力して天牛を倒しますが、フンババと天牛を殺した罪によってエンキムドゥは神々から死を与えられます。『ギルガメシュ叙事詩』においては、人が神の領域に踏み込んで、神を殺したことに對して、天から罰が与えられたのです。

これに對して、シシ神を殺したエボシには天から罰を与えられませんでした。モロの首がエボシの腕を食いちぎりますが、エボシは死ぬことがありませんでした。そして、首を失ったデイダラボッチも森とエボシのタタラ場を破壊しましたが、デイダラボッチが倒れた後、森は復活します。山本ひろ子は、エボシが死なな

かったことに對して、「神（神靈）は殺しうるのか。殺しうるような存在を「神」と呼ぶべきなのか。しかも、手輕な「技術」によつて簡単に殺され、殺戮の後にとりたてて災厄も苦難ももたらさない神とは…」と、いらだちを含んだ口調で激しく批判しています（「へ癪痕」を失つた物語『もののけ姫』批判、「ユリイカ」29-11、一九九七）。山本のいらだちは、「もののけ姫」が神を描きながら、そこから神が本来持つてゐるはずの恐ろしさが失われていることが原因となっています。

「もののけ姫」制作の段階で、エボシが死に、森も復活しない終わらせかたも検討されたとのことですが、宮崎はあえてそのような終わらせ方を採用しませんでした。宮崎自身はその理由について、「神様の代わりに人間に罰を下してカタルシスを得ようというような発想は捨てなきゃいけないと思いました」と発言しています（「引き裂かれながら生きていく存在のために」、「ユリイカ」29-11、一九九七）。宮崎自身が意図していたかどうかは分かりませんが、エボシに天から罰が与えられなかったことによつて、「もののけ姫」は近代文明と自然が共生できる可能性を提示する物語として完結するかたちになりました。「もののけ姫」は、人類の未來に對して絶望していません。近代文明は持続可能な開発という価値観を得ることによつて自然と共生できる、これが「もののけ姫」の神話的なメッセージです。人類の未來は、共生という価値観によつて、明るい見通しが与えられているのです。

#### 参考文献

- 安田喜憲『森を守る文明・支配する文明』PHP新書、一九九七。  
切通理作『宮崎駿の「世界」』ちくま新書、二〇〇一。  
青井汎『宮崎アニメの暗号』新潮新書、二〇〇四。  
村瀬学『宮崎駿の「深み」へ』平凡社新書、二〇〇四。  
佐々木隆『「宮崎アニメ」秘められたメッセージ』ベスト新書、二〇〇五。